

2025年1月6日

各 位

会社名 株式会社キャンバス  
代表者名 代表取締役社長 河邊 拓己  
(コード番号：4575 東証グロース)  
問合せ先 取締役最高財務責任者 加登住 眞  
IR@canbas.co.jp

### CBT005 米国特許庁から特許査定受領のお知らせ

このたび、当社が創出した免疫系抗がん剤候補化合物CBT005に関して、米国特許庁から特許査定\*を受領しましたのでお知らせします。

- 【発明の名称】 Phosphatidylserine-binding conjugates  
(参考訳：ホスファチジルセリン結合複合体)  
【出願番号】 18/090,259 (2023年7月6日国際出願 WO2023126885)  
【特許権者】 株式会社キャンバス

CBT005は、外形的にはPDC (ペプチド-薬物複合体) に分類される免疫系抗がん剤候補化合物です。

がんの生存戦略のひとつに「免疫回避」があります。がん細胞は非自己の抗原を表面に持っているのが本来は免疫細胞に攻撃されるはずなのですが、いくつかの方法で自己抗原と同じような扱いをさせ、免疫のスイッチをOffに変え、攻撃を免れています。

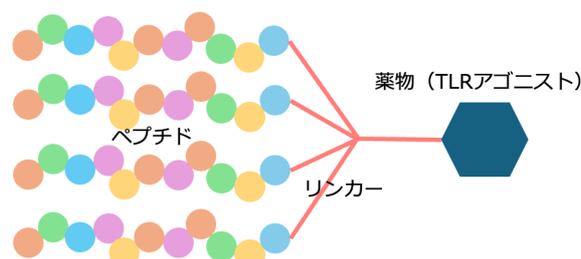
免疫システムが誤って自己抗原を攻撃してしまうと自己免疫疾患になってしまうので、免疫にブレーキを掛けるしくみは強力です。がん細胞はこれを上手に利用しているのです。

免疫システムのスイッチOn/Offには、抗原提示細胞 (マクロファージなど) が重要な役割を果たしています。抗原提示細胞は、死にかけた細胞を食べて処理し、その結果の部品を使って「On : 攻撃する」「Off : 攻撃しない」の指示をT細胞に示します。

抗原提示細胞のトールライクリセプター (TLR) が刺激を受けると、この指示がOnになり、T細胞が攻撃を始めます。このため、TLRは免疫系抗がん剤の有効なターゲット候補として研究開発が進められてきました。しかしながら、全身に投与して免疫スイッチがOnになってしまうと、大きな副作用が起きてしまいます。これを避けるために、がん組織だけで効果を発揮させ副作用を抑制する方法が数多く試みられています。

CBT005は、このTLRを活性化するアゴニストと、がん細胞が死ぬときに細胞表面に提示されるホスファチジルセリンに結合する4つのペプチドを、リンカーで結合させた複合体です。抗体と薬物を結合させたものをADCと呼ぶのと同様に、ペプチドの場合にはPDC (Peptide-Drug Conjugate) と呼ばれます。

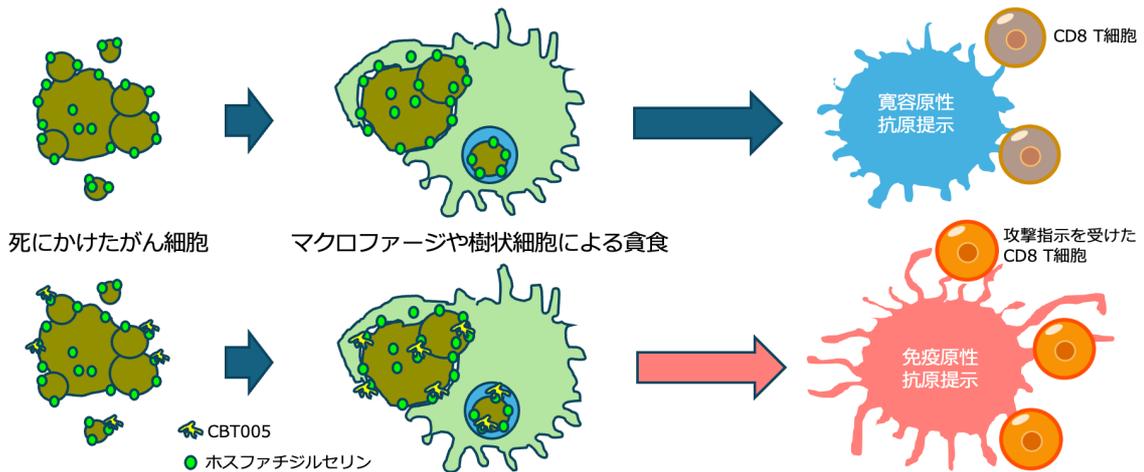
《CBT005模式図》



がん細胞が死にかけるとホスファチジルセリンが表面に表れ、CBT005は上の模式図の左側にあるペプチド部分を使ってここに結合します。抗原提示細胞ががん細胞を食べたあと、一緒に食べられたCBT005の右側TLRアゴニストが抗原提示細胞のTLRを活性化し、T細胞への指示を「On：攻撃する」に変える・・・というのが、CBT005の目指す作用機序です。

免疫着火剤CBP501とは異なる方法で免疫ホットにする化合物と表現することもできます。

《想定しているCBT005作用機序》



今回の新たな特許獲得は、キャンパスがこれまで蓄積してきたがん免疫領域の知見やペプチド医薬創出の経験値の成果であり、当社の企業価値の源泉である創薬パイプライン創出能力の高さを示すものです。

今後私たちは中期的に、CBT005を前臨床試験に進めていくことによって、将来の有望な開発パイプラインのひとつとしていく方針です。

今回の特許査定受領による当期業績への影響はありませんが、創薬パイプラインの拡充など中長期的な企業価値の向上に寄与することが期待されます。

以上

\* 特許査定とは、特許庁の審査で特許権を与える価値のある発明と判断されたことを示すものです。このあと特許料を納付することで特許権の効力が発生します。当社は、特許の成立に関し、原則として米国・欧州・日本それぞれ最初の成立（特許査定）のみを公表しています。